



The Kyoto University Library Bulletin

勉強すること

湯川 秀 樹

私が京都大学に入学したのは大正15年の春であったが、先ず最初に感じたのは、いかにも大学らしい静けさであった。当時の物理学教室は時計台の西側にあった。現在の燃料化学教室の赤煉瓦の建物がそれである。二階に小さな図書室があり、そこで専門雑誌を読みふけた。隣の三高の学生だった頃とは打ってかわって、スポーツや野球の応援などはきれいに忘れて、いちずに勉強した。それがまた何ともいえず楽しかった。東大路の通りにも、まだ電車は走っていなかった。私の精神集中を妨げる雑音もなかった。私のあこがれていたアカデミックなふんい気だけが、そこにただよっていたのである。

それから40年たった今日の京都大学はどうであろうか。学生の数は何倍かになり、新しい建物が次々とできていった。空地も少なくなった。人の往来も激しく、建築工事の騒音も絶えない。このように変貌してゆく大学の中で、精神を集中させることは容易でなくなった。今の学生諸君は気の毒だと思う。しかし環境のよかった昔でも、勉強しない学生はたくさんいた。先生も今の方が、ずっと雑用が多いのだが、昔の先生が皆、研究らしい研究をしていたわけではない。幸いにして京都大学は、まだまだアカデミックなふんい気の多分に残っているところである。東京へ行って駿河台からお茶の水のあたりを通るごとに、やっぱり京都は落ちついて勉強ができるところだという感を深くする。京大の付属図書館もずいぶん立派になり、便利になった。何はともあれ、学生時代に勉強しておくことである。

(基礎物理学研究所長)